

はじめに



「形とはたらき」領域総括 丸山 工作

さきがけ研究21「形とはたらき」領域が平成9年秋に発足してから早くも3年が経過し、ここに1期生10名が満期終了となります。2期生20名、3期生8名がつづいています。

「形とはたらき」とは何を研究対象とするのか、あまりに漠然として明確ではありません。主として生物学と化学を念頭におきましたが、ところが多数の応募があり、1期生の場合、じつに25倍という倍率で、私どもはうれしい悲鳴をあげました。というのは、書類選考をへて面接で半分に減らすのは至難だったからです。私たち選考委員は、努力と時間に比例する計画を提出した優等生タイプはなるべく避け、もしかしたら何か刮目に価する成果が出るのでは？という見地を取りました。そして生物系8人、化学系2人が選ばれたというわけです。

それから3年間、1年に1度か2度、10人すべてからすばらしい進展を聞き、大いに安心しました。しかも、そのほとんどが、「さきがけ」研究の支持がなかったら、そうはいかなかったというのですから、なおさらです。

1つ2つ、その例を述べてみましょう。神奈川大学の宇佐見義之さんは、絶滅した太古の生物の挙動をCGの世界で再現するのにみごとに成功しています。単なる推察ではなく、想定運動器官のはたらきをシミュレートした結果です。これは、科学教育にも寄与すると思います。また、ショウジョウバエの遺伝を研究していた九州大学の仁田坂英二さんは、子供のときから好きで集めていたアサガオの種子を農場で栽培し、江戸時代から伝わるさまざまな変異株（1000種類！）を再現させています。丹念な遺伝子解析をおこない、日本独自のモデル植物にしようと努めています。まさに古い皮袋に新しい酒をそそぐわけです。

21世紀の日本の科学を支えるであろうこれら10人の1期生の皆さんたちを私は心から誇りといたします。これから先、さきがけ時に培った萌芽を健やかに育てあげてほしいと願っております。そして、つづく2期、3期生も1期生にあやかるよう希望しています。

おわりに1期生たちのいろいろな、時には面倒な要望に寛大な理解を示して下さった科学技術振興事業団、ならびに実際にお世話下さった当領域の小松謙一、豊田弘之両参事、高橋則子事務員他の方々に厚く御礼申しあげます。多忙にもかかわらず、選考はもちろんのこと発表会に参加して助言していただいたアドバイザーの先生方に深謝いたします。私自身は古希をすぎてこのような立場にあることをただ有り難いと思っております。